

# B型肝炎

B型肝炎ウイルス（HBV）は、全世界で、約3億5,000万人が感染していると言われ、そのうち日本では、約130～150万人（およそ100人に1人）が感染していると推定されています。

現在、年間約10,000人の新規感染者がいると言われています。

感染ルートとしては、①HBVに感染した母親から子どもへの感染（母子感染）、②感染対策が不完全な時代の幼少児に対する集団予防接種などの医療行為、③HBV感染者との性的接触が挙げられます。しかし、最も多かった感染経路①は1986年から始められた母子感染予防対策事業（出生時のHBワクチン接種等）でほぼなくなり、近年新たに感染する原因のほとんどは③の性的接触によるものです。

## 経過

### B型急性肝炎

感染して1～6ヶ月の潜伏期間を経て、全身倦怠感、食欲不振、悪心、嘔吐、褐色尿、黄疸などが出現します。中には、劇症肝炎になることもあります。一般に、劇症化に至らない場合には、数週間で肝炎は極期を過ぎ、回復過程に入ります。

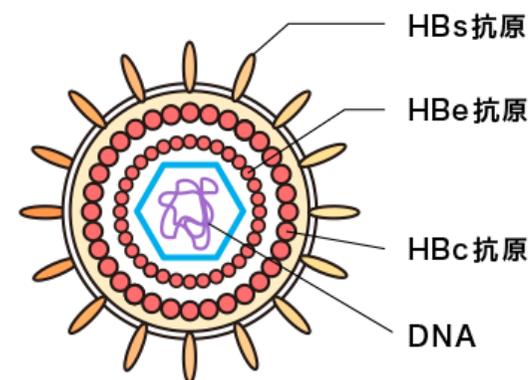
### B型慢性肝炎

出産時ないし乳幼児期にHBVが感染すると、幼い体の免疫系はウイルスを病原体と判断できず、持続的にウイルスが存在し続ける状態（持続感染）に移行します。生後数年～数十年間は肝炎が起きずに、感染したHBVは排除されることなく体内で共存しており、この状態を無症候性キャリアと言います。思春期を過ぎると自己免疫力が発達して、HBVを異物（病原体）であると認識できるようになり、一般に10～30歳代に一過性に強い肝炎を起こし、HBe抗原陽性のウイルス増殖の高い状態からHBe抗体陽性の比較的ウイルスが少ない状態に変化します。これをHBe抗原からHBe抗体へのセロコンバージョンと言います。

HBe抗体陽性となった後は、多くの場合肝炎はおさまっていき、非活動性キャリアとなります。このように思春期以降に一過性の肝炎を起こした後は、そのまま肝機能が一生安定する人がおよそ80～90%ですが、残りの10～20%の人は肝炎の状態が持続する、慢性肝炎となります。慢性的に細胞が壊れ続けると、線維化という状態が生じるようになり、やがて線維化が進行して固くなってしまったのが肝硬変です。また、再生の過程で肝細胞癌が出てくることもあります。

## 予防

現在、我が国で行われているHBVに対する感染予防は、①HBV持続感染している母親からの出産時感染予防対策によるHBV免疫グロブリンとワクチン接種の組み合わせによる予防、②医療従事者など希望者に対するワクチン接種による予防、さらに2016年10月より③0歳児全員に対するB型肝炎ワクチン（HBワクチン）による予防が行われています。



検査	意味すること
HBs抗原+	現在、B型肝炎ウイルスに感染していることを示します。
HBs抗体+	過去、B型肝炎ウイルスに感染していたことを示します。
HBe抗原+	B型肝炎ウイルスに感染しており、感染性が強いことを示します。
HBe抗体+	B型肝炎ウイルスに感染しているが、感染性が弱いことを示します。